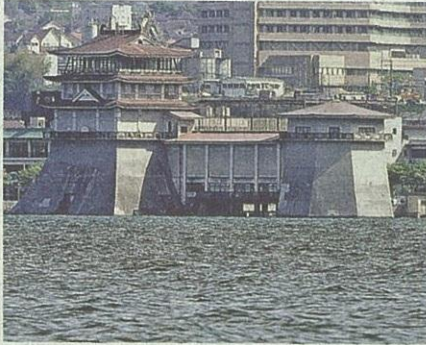


大津市も活用意向なし

老朽化などで休館中 琵琶湖文化館



湖上の城のように浮かぶ琵琶湖文化館。土台だけを残して公園にするよう市民団体が提言している(大津市柳が崎より南東を臨む) | 撮影・薄田和彦

湖上の城のように浮かぶ休館中の滋賀県立琵琶湖文化館(大津市打出浜)を巡り、県に続いて同市も活用意向がないことが13日までに分かった。耐震化などに費用がかかり、琵琶湖の占用許可が厳しいため。行政がお手上げの中、まちづくりを考える市民らが、建物を撤去し土台だけを残して公園にするユニークな案をまとめ、消えゆく流れ

に「待った」をかけている。

文化館は1961年に博物館として開館。建設費1億5千万円のうち9千万円を大津市や、長浜市出身でヤンマー創業者の故山岡孫吉氏らの寄付でまかなった。2008年春に建物の老朽化や県の財政難から休館。仏教美術を中心とした収蔵品は新生美術館に移すため、オープン予定の19年度末までは保管機能を果たすことになっている。

問題は博物館としての位置付けが終わってから。県などによると、埋め立て地でなく湖中に建っているため、原則、公共的な使い方であれば河川法と港湾法に基づく許可が下りず、琵琶湖に戻す必要が生じるといふ。加えて現在の建物を使い続けるには耐震化やバリアフリー工事などで多額の改修費がかかり、三日月大造知事は昨年7月の県議会で「活用は難しい」との考えを表明した。県から施設利用の照会を受け

県に続き 市民ら「土台残し公園に」

大津市も4月上旬に「活用意向はない」と文書で回答。ただ、活用策を検討してきた市中心市街地活性化協議会の「湖岸デザインプロジェクト」の審議結果を尊重するよう記した。

有識者でつくる同プロジェクト会議が3月末にまとめた報告書によると、天守閣と石垣のような建物部分を県が撤去し、土台だけを残す方法が経費も抑えられる、と指摘。市が公園として占有し、カフェや展望デッキなどを設け、湖岸をつなぐにぎわいの場として活用するよう提言している。

同プロジェクトリーダーを務めるまちづくり大津の秋村洋取締役(47)は「琵琶湖に戻しては今後何もできない。『ピワイチ』(琵琶湖一周サイクリング)や『ランナーズステーション』の拠点になり得るなど活用のポテンシャルが高いことを行政に伝え、一緒に考えていきたい」と話す。

県文化財保護課は「提言の自身をまず確認し、県として可能か判断したい」としている。

(国貞仁志)